「龍頭が滝案内」　第２回

「『雲陽誌』から松笠を読む！（その１）」

　さて、今回は『雲陽誌』です。松江藩３代藩主綱近のとき、儒臣黒沢長顕と斎藤豊仙に松江藩の地誌編纂が命じられましたが、綱近が没したため中断。その後、５代宣維が長顕の弟長尚に命じて享保２年（1717）に完成したのが、『雲陽誌』。

　掛合町では、松笠ほかに多根・掛合・穴見・入間・波多の各村についても記載があります。松笠の条では龍頭が滝や明泉寺のことなども載っています。

　では、さっそく江戸時代の松笠を訪れることにしましょう。

〇雲陽誌

　松笠

　　天神社　菅公をまつる　天文年中より寛文まで造立修復の棟札あり　祭礼十月廿五日なり

　　此山烏帽子の形なり　故里民烏帽子山という　高さ三十間ばかり横六十間の巖山なり

まず、「天神社」が出てきましたが、これは松笠天満宮のことでしょう。

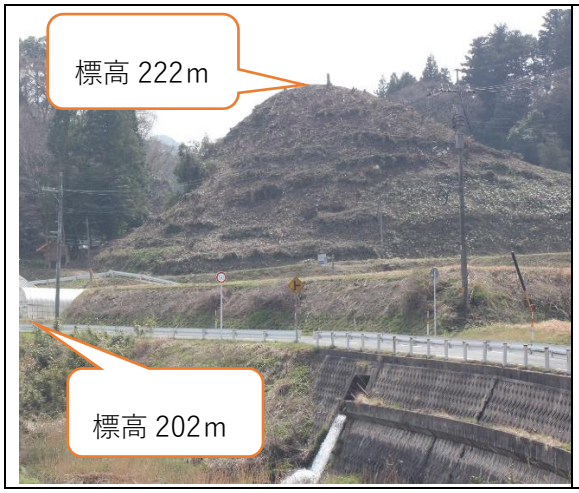
菅公とは菅原道真公。

　「天文」「寛文」というのは元号で、使用期間は西暦に直すと、前者が１５３２年から１５５５年まで、後者は１６６１年から１６７３年までです。

　棟札は新築や改修時に建物に収める札のことなので、松笠天満宮は１５３０年代には松笠にあったということになります。

天文年間といえば、尼子と毛利が合戦をしていた時代です。

「烏帽子山」が出てきました。形からいって、松笠天満宮すぐ後ろにある山ではないでしょうか。烏帽子の形ということで、烏帽子も並べてみました。



烏帽子山と烏帽子。

似ているかも・・・

高さ３０間ばかりとあるので、１間 ＝1.8m とするとこの山は 50m を超えることになりますが、標高差からいうと県道から 20m ほどの高さの山です。当時の人々はどうやって測ったのでしょうか。　（続く）